

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23069

研究課題名（和文）短縮語形成の音韻的メカニズムに関する実験的・対照言語学的研究

研究課題名（英文）A study of phonological mechanism of truncation: An experimental and contrastive approach

研究代表者

文 昶允（Moon, Changyun）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：60845030

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、短縮語（「デジタル・カメラ」が「デジカメ」となる現象）が作られる過程にどのような音韻的規則が適用されるかについて、実験的・対照言語学的な観点から探究する。これまでの研究から得られた研究成果により、調音点の類似によってもたらされるOCPについては解明されている。しかし、その他の音韻的類似性に関与する具体的な要因の解明は手つかずのままである。また、従来の研究は、個別言語における現象の一般化にとどまっており、普遍的な言語現象としての短縮語を探索するには至っていない。以上を踏まえると、短縮現象にみる言語多様性および言語普遍性を記述するために、他言語との対照研究は必要不可欠である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

OCPは、日本語を含め多くの言語で観察および分析されているが、短縮語形成におけるOCPの影響を相上に載せた実験的研究は管見の限り存在しない。また、短縮語形成における音韻特徴については、他言語と比較・対照した上で総合的記述を目指している研究はこれまでにない。本研究によって日・中・韓短縮現象の音韻特性が解明された際には、通言語学的研究も期待できる。

研究成果の概要（英文）：This research examines the phonological rules in the formation of clipped compounds (e.g., 'dezitaru kamera (digital camera)' being clipped into 'dezikame', from an experimental and comparative linguistic perspective. Previous studies have elucidated from the perspective the Obligatory Contour Principle (OCP), driven by articulatory similarity. However, they have not thoroughly investigated the specific factors contributing to other phonological similarities.

Furthermore, previous research has been confined to generalizing phenomena within individual languages, falling short of examining clipped compounds as a universal linguistic phenomenon. Therefore, the present study takes a cross-linguistic comparative approach to comprehensively describing the linguistic diversity and universality in the formation of clipped compounds.

研究分野：言語学、日本語学、音韻論

キーワード：短縮語 OCP 音節 特殊モーラ 声調 有標性 外来語

## 1. 研究開始当初の背景

短縮現象とは、主に外来語において頻繁に見られる現象であり、基の語の一部を切り取ることによって新たな語を作り出すことである (Itô 1990; 窪園 2002)。短縮語は、基の語の語構成により、単純語短縮と複合語短縮に分けられる。単純語短縮は、基の語の左端または右端から順に削除することで短縮語が形成される (例: イラストレーション → イラスト)。一方、複合語短縮は、複合語を構成する各構成要素の語頭から順に切り取るというプロセスが一般的である (a)。

ところが、複合語を構成する前部要素の 2 拍目に長音が含まれていると、(b) のような不規則的なパターンが生じる (以下、「・」は、複合語を構成する構成要素の境界を示す)。

- a. シャープ・ペンシル → シャーペン
- b. パーソナル・コンピューター → パソコン、\*パーコン

先行研究 (文 2016ab; Moon 2018 など) により、短縮の結果出来上がった語の内部において、類似した音の連続は避けられやすいことが明らかにされている (例: シャープ・ペンシル → シャープペン (syapu-pen) の場合、短縮語の内部に同一子音 /p/ が連続してしまう)。このような現象は、長年の理論研究の中で Obligatory Contour Principle (以下、OCP) として説明されてきた (Leben 1973; Goldsmith 1976)。しかし、以下のような論点が課題として残されている。

問題 1 類似性に関する音韻的要因の特定が一部にとどまっていること

問題 2 言語一般に適用可能な分析がなされていないこと

これまでの研究から得られた研究成果により、調音点の類似によってもたらされる OCP については解明されている (Moon 2018)。しかし、その他の音韻的類似性に関する具体的な要因の解明は手つかずのままである。OCP に違反する音韻的類似性とは何かという問題を実証的に解明することによって初めて、類似性に関わる音韻的要因の全体図が見えてくると考えられる。

また、日本語の短縮現象は、音韻構造 (音節、拍など) が果たす言語的役割の重要性を示す上で非常に有効な研究対象とされてきた。しかし、従来の個別言語研究は、当該言語における現象の一般化にとどまっており、普遍的な言語現象としての短縮語を探る研究には至っていない。以上を踏まえると、短縮現象にみる言語多様性および言語普遍性を記述するためには、他言語との対照研究は必要不可欠である。

## 2. 研究の目的

上記の問題を受け、本研究では以下のような 2 つの目的を設定した。

目的 1 どのような音韻的要因が類似性に関するか、実験を通して検証すること

目的 2 目的 1 の言語特徴が他言語においても観察できるかどうか比較・対照すること

まず、短縮現象に影響する音韻的要因を解明するためには、言語外的要因 (社会的要因、語彙的要因など) を取り除く必要がある (文 2017)。本研究では、話者の心的辞書 (レキシコン) に記載されていない仮想語を用いて実験を行い、どのような音韻的要因が類似性に関するかを探究する。次に、他言語における短縮現象を比較・対照することで、短縮という言語現象にみる音韻特徴の多様性に加え、普遍原理の一端を解明する。

## 3. 研究の方法

### 研究 1 短縮語形成に影響する OCP についての実験研究

先行研究により、調音点 (place) に関しては「唇音 > 舌頂音、舌背音」の順に OCP が強く働くという結果が得られている (文 2016ab; Moon 2018)。この結果に調音様式 (manner) などによる検証を加えることで、類似性をより強く引き起こす音韻的要因を特定することができる。

調音様式 (manner) に関する仮想短縮語実験を例として説明すると次の通りである。実験では、形成された短縮語の連続する子音が、同じ調音点を有する一方で調音様式は異なるという音韻条件を設ける。例えば、/p/ と /m/ は、いずれも唇を調音点とする子音であるが、調音様式はそれぞれ破裂音と鼻音で異なる。実験協力者には、音韻条件が異なる 2 つの語形 (例: セパパレ vs. セママレ) の中から、より自然に感じる語形を 1 つ選んでもらい、その結果を分析する。同様に、有声性 (voice) の影響についても検証する。日本語において、一般に有声重子音の出現が阻止されやすい (Kuroda 1965; Itô and Mester 1999) が、外来語では随意的に起こり得る (Itô and Mester

1995; Nishimura 2003) (例: ドッグ (doggu) ~ ドック (dokku))。後部要素の頭子音が無声音である場合 (例: ロックラ) と有声音である場合 (例: ログラ) における仮想短縮語実験を通して、有声音が音韻の類似性に与える影響について明らかにすることができる。

## 研究2 短縮語形成にみる多様性と普遍性についての対照研究

短縮語の形成における多様性と普遍性を探るため、日本語の研究成果に加え、韓国語と中国語の短縮語データを比較・対照した。韓国語と中国語の短縮現象を分析するためには、日本語の短縮語データ (異なり語数 1,101 語) と量的・質的に等しいデータが必要である。韓国語と中国語における短縮語の収集には、フィールド調査と文献調査を併用した。これらの調査を通じて収集したデータを分析することで、個別言語の特徴に加え、言語一般的な特徴の解明を試みた。

### 4. 研究成果

まず、研究目的1 (どのような音韻的要因が類似性に関与するか、実験を通して検証すること) を達成するために、実験研究を行った。その結果は次の通りである。

(1) Moon and Kumagai (2019) では、OCP を有標性 (markedness) という観点から捉え、外来語を基体とする複合語の短縮過程に OCP がどう影響するかについて考察した。

前部要素の2モーラ目に長音を含む複合外来語の短縮形としては、保持形 (例: シャープ・ペンシル → シャーペン) と補完形 (例: パーソナル・コンピューター → パソコン) が生じ得る。実験では、基体を構成する前部要素が無意味語、後部要素が有意味語からなる仮想複合語を用いた。また、前部要素の無意味語には、仮想の意味を付け加えている (例: シーダリス (致命的な)・ダメージ)。音韻条件としては、次の3つを設けた。条件Iでは、補完形として短縮されても OCP 違反が生じない (例: カーヤリス・タキシード → カヤタキ (kaya-taki))。条件II (OCP-C) では、補完形として短縮された場合、形態素境界部で同一子音が連続する (例: シートレス・タピオカ → シトタピ (sito-tapi))。最後に、条件III (OCP-CV) では、補完形の形態素境界部で同一音節が連続する (例: シーダリス・ダメージ → シダダメ (sida-dame))。調査協力者 (日本語母語話者) には、仮想複合語とともに保持形 (例: シーダメ (sii-dame)) と補完形 (例: シダダメ (sida-dame)) の2つの例を提示し、短縮語としてより自然に感じる語形を1つだけ選んでもらった。本研究を通じて明らかになったことは、次の2つである。第一に、「条件I < 条件II (OCP-C) < 条件III (OCP-CV)」の順に有標性が高い。第二に、OCPの影響は和語や漢語のみならず、外来語においても明確に現れる。

(2) 文・熊谷 (2021) では、形態素の境界部に置かれる重子音 (geminate consonant) の有標性が短縮語形成に与える影響について考察した。

単純語の場合、無声阻害音だけでなく、有声阻害音も重子音を形成することができるが (例: /kjappu/, /heddo/)、接近音は一般に促音化しにくく、その実例も外来語のうちごく稀にしか見られない (例: アッラー /arraa/) (Kawahara 2015)。一方で、複合語短縮は、無声阻害音が最も促音化しやすい (例: /nikkado/)。複合語由来の短縮語データ (文 2021) において、前部要素の第2モーラが促音である例は26語であった。そのうち、短縮語形に促音が保持される例を取り出した結果、重子音が無声阻害音からなるものが圧倒的に多かった。しかしながら、そもそもデータベースのうち促音を含む実例がかなり僅少であるという点、また、複合語の構成素によっては特定のパターンとして短縮されがちであるという問題があった。これらの問題を克服するために、語形成実験を行った。具体的には、複合語を構成する後部要素の頭子音の音韻特徴によって、保持形と補完形の選択率に差があるかどうかを検証した。語形成実験の結果は次の2点でまとめられる。1つ目は、外来語であっても、母語話者のレキシコンにない新語に対しては、和語に働く音韻制約が適用され得る可能性があるという点である。2つ目は、聞こえ度が高い重子音であるほど有標性が高く、かつ重子音の有標性が短縮語に影響する音韻的要因の1つであるという点である。

(3) 文・熊谷 (2024) では、複合語短縮の韻律構造に焦点を当てて、重音節が連続する出力形は避けられるかどうかについて検証した。

複合語短縮のデータ (文 2021) の実例分析を通して、連続した重音節を有する出力形は比較的少ないことが確認された。しかし、重音節が連続する短縮語が少ない理由として、重音節の連続が構造的に嫌われているからではなく、単に重音節から始まる前部要素と後部要素の複合語自体が少ないからという理由が考えられる。従って、複合語短縮の出力形として、重音節の連続が回避されやすいかどうかについて実験的に検証する必要がある。仮想短縮語実験を行った結果は、次のようにまとめられる。第一に、複合語短縮は、保持形として短縮されることが多い。第二に、短縮語形において重音節が連続する構造は、一様に回避されるとは限らない。特に、複合語を構成する前部要素の第1音節に促音または長音を含む語においては、そこに撥音や二重母音を含む語に比べて、保持形より補完形が選ばれやすく、それは促音と長音を持つ特殊モーラとしての特徴に起因すると考えられる。

次に、研究目的2（目的1の言語特徴が他言語においても観察できるかどうか比較・対照すること）を達成するために、データ調査及び分析を行った。その結果は次の通りである。

(1) 文昶允・劉莎(2023)では、日本語・中国語・韓国語における短縮語がどのような音韻的規則から作られるのかについて探究するために、実例調査及び分析を行った。結果をまとめると次の通りである。第一に、韓国語の場合、日本語と同じく複合語の前部要素から1音節、後部要素から1音節を切り取るパターンが最も一般的であるが、類似する分節音の連続によるOCPは違反しやすい。第二に、中国語の場合、典型的な短縮語形は日本語・韓国語と同様であり、同一音調が連続する語形であっても短縮語として許容される。

#### <参考文献>

- Goldsmith, J. 1976. *Autosegmental phonology*. PhD dissertation. MIT. Published 1979. New York: Garland.
- Itô, Junko. 1990. Prosodic minimality in Japanese. *CLS* 26(2). 213–239. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Itô, Junko and Armin Mester. 1995. Japanese Phonology. In Goldsmith, J. (ed.). *The Handbook of Phonological Theory*. 817–838. Oxford: Blackwell.
- Itô, Junko and Armin Mester. 1999. The Phonological Lexicon. In Tsujimura, Natsuko (ed.). *The Handbook of Japanese Linguistics*. 62–100. Oxford: Blackwell.
- Kawahara, Shigeto. 2015. Japanese /r/ is not Featureless: A Rejoinder to Labrune (2014). *Open Linguistics*. 1. 432–443.
- 窪園晴夫 2002 『新語はこうして作られる』東京：岩波書店。
- Kuroda, Sigeyuki. 1965. *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. PhD dissertation. MIT.
- Leben, William R. 1973. *Suprasegmental Phonology*. PhD dissertation. MIT.
- 文昶允 2016a 「必異原理（OCP）が短縮語形成に与える影響について」『筑波日本語研究』20. 109–126.
- 文昶允 2016b 「長音を含む複合語由来の短縮形について」『音韻研究』19. 43–50.
- 文昶允 2017 「短縮語の形成方略に観察される世代差について - 前部要素の2モーラ目に長音を含む短縮外来語とその選好傾向 - 」『日本語の研究』13(3). 18–34.
- Moon Changyun. 2018. The Influence of OCP-Place on Word Truncation: A Study of Modern Japanese Abbreviation of Compound Loanword Nouns with Long Vowels. *Proceedings of the 25th Japanese/Korean Linguistics Association*. 1–10.
- Moon Changyun, Kumagai Gakuji. 2019. Markedness in Loanwords: The Case of Compound Truncation in Japanese. *Proceedings of the 12th Generative Linguistics in the Old World in Asia and the 21st Seoul International Conference on Generative Grammar*. 517–526.
- 文昶允 2021 『日本語における短縮外来語の形成とその仕組み』東京：ひつじ書房
- 文昶允・熊谷学而 2021 「短縮語形成に影響する音韻的要因について - 重子音における有標性を中心に - 」『日語日文学研究』116. 61–78.
- 文昶允・劉莎 2023 「複合語由来の短縮語形成について - 日本語・韓国語・中国語を対象とした実態調査に基づいて - 」『韓国日語日文学会 2023 年度夏季国際学術大会プロシーディングス』33–36.
- 文昶允・熊谷学而 2024 「複合語短縮における重音節の連続の回避についての検証」『音韻研究』27. 35–42.
- Nishimura, Kohei. 2003. *Lyman's Law in Loanwords*. M. A. thesis. Nagoya University.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 文昶允, 熊谷学而	4. 巻 116
2. 論文標題 短縮語形成に影響する音韻的要因について - 重子音における有標性を中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日語日文学研究	6. 最初と最後の頁 61-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Moon Changyun; Kumagai Gakuji	4. 巻 Year 2019
2. 論文標題 Markedness in Loanwords: The Case of Compound Truncation in Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019 Universal Grammar and Its Cross-linguistic Instantiations	6. 最初と最後の頁 517-526
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kumagai Gakuji, Moon Changyun	4. 巻 25
2. 論文標題 Do Labial Consonants Evoke the Images of Softness and Cuteness Cross-linguistically?: An Experiment with Chinese and Korean Speakers	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音声研究	6. 最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 文昶允, 熊谷学而	4. 巻 27
2. 論文標題 複合語短縮における重音節の連続の回避についての検証	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 音韻研究	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 文昶允
2. 発表標題 複合語由来の短縮語データベースと短縮語形の分布
3. 学会等名 韓国日語日文学会2020年度冬季国際學術学会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 文昶允
2. 発表標題 短縮語形成における特殊モーラの振る舞い
3. 学会等名 東アジア若手研究者国際學術フォーラムー依存と融合：日本研究の新たな展望ー（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 文昶允
2. 発表標題 複合外来語に由来する短縮語の形成メカニズムに関する研究
3. 学会等名 韓国日語日文学会2020年度秋季學術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Moon Changyun; Kumagai Gakuji
2. 発表標題 Markedness in Loanwords The Case of Compound Truncation in Japanese
3. 学会等名 Generative Linguistics in the Old World in Asia 12 in Seoul Seoul and Seoul International Conference on Generative Grammar 21（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Moon Changyun
2. 発表標題 What Phonological Factors Affect the Formation of Loanwords Compound Truncation in Japanese?
3. 学会等名 The 3rd European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Moon Changyun
2. 発表標題 Hierarchy of Special Morae in Japanese: Evidence from Loanword Compound Truncation
3. 学会等名 NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 文昶允
2. 発表標題 複合語由来の短縮語形成について 日本語・韓国語・中国語を対象とした実態調査に基づいて
3. 学会等名 韓国日語日文学会 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 文昶允, 熊谷学而
2. 発表標題 複合語短縮における重音節の連続について
3. 学会等名 Phonological Association in Kansai
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 文昶允	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 164
3. 書名 日本語における短縮外来語の形成とその仕組み	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------